

後援会ニュース「しおかぜ」は街づくりのコミュニティ紙として皆さんの暖かいご支援をお願いします。ご意見をお聞かせください。



しおかぜ

日本共産党浦安市東部後援会
News

第78号

2020年 11月11日
編集責任者 元木計文
047-355-8526
部内資料

— コロナ禍でも共に学び語りあえる場を —



2005年に設立されてから15年にわたり、日本国民の宝・世界の宝とされている日本国憲法と平和を守る活動を広く市民の皆さんと共に進めてきた「九条の会・浦安」事務局代表の中村さんに「現状と今後について」寄稿して載しました。



【2018年7月富岡公民館での講演会】



大学生からの切実な声 GOTO「学び」



政府のコロナ対策はすっかり経済へとシフトして「トラベル」だ「イート」だと人の流れを加速するGOTOがかけられている。駅前や都心の人の流れも2、3か月前とはすっかり様変わりしていることがわかる。

こうした中で大学生から旅行や食事だけでなく「学び」にもGOTOを出しての切実な声が挙がっている。コロナ禍でずっとキャンパスに出入りできない学生にとっては当然の要求である。

私は永年公立学校に勤務していた関係から退職したら地元で子どもや若者に関わるボランティア活動ができればと考えていた。退職後に浦安に「九条の会」があることを知り、会の催しに何度か参加するうちに縁あって事務局のお手伝いをするようになった。(子どもと若者の未来にとって「平和」の保障こそ根本のことである)との思いからである。以来現在に至っているが、この間の活動は「戦争のできる国造り」をめざす安倍政治との対決

であった。今は菅内閣へとバトンタッチがされているが、その政治の本質は相変わらずで、学術会議の新会員任命をめぐり6名の学者をパージした問題は論議も説明も意に介さない強権そのものである。また、コロナ禍であれば第一に国民の命とくらしを守る手立て(公助)を説明すべきなのに自助・共助を強調する菅内閣の方針にはまったく期待が持てない。



安倍政治の下で踏みつけにされた民主主義とその継続を目指す菅内閣の下でこれ以上の侵行をさせないためには「コロナだから仕方がない」と自粛に落ち込んだり、閉じこもる

のではなく多方面のことに興味と関心を抱いている市民相互の交流と学びの場づくりが今こそ重要であると考えます。

とりわけ「平和・人権・環境・共生」をテーマとして毎日の生活と憲法との関係について学び合い、語り合い、集い、行動する場として「九条の会・浦安」の存在意義をさらに高めていきたい。

(九条の会・浦安 中村)

【大西元学術会議会長の資料で判明】

菅首相の学術会議への認識は事実に反する



しかし、実は

若い人も極端に少ない
民間の人が極端に少ない

地方の会員も選任されえる多様性が大事だ。一部の大学に偏っている。

【大学以外に所属する会員】	
2011年 11.4%	▶ 20年 14.2%
【地域分布】	
11年 関東地方59.5%	▶ 20年 49.5%
それ以外40.5%	50.5%
【特定大学への集中】	
11年 28.1%	▶ 20年 16.7%
【男女比】	
11年 男性76.7%	▶ 20年 62.2%
女性23.3%	37.7%
【若手研究者育成の取り組み】	
14年から「若手アカデミー」を発足し、45歳未満の研究者を主として連携会員に	

大西氏の資料から

大西氏が提供した資料は、男女比、会員の地域分布、特定大学への集中は正の「成果」を年次ごとに示したもので、女性比率や関東以外の大学の構成比が大きく前進していることを示しています。

任命拒否 正当化

菅首相発言 すべて虚偽

【しんぶん赤旗 10月29日版より】

てんで変わる

全米大会で世界を沸かせたナオミ
白球をたく強さだけではなく
敢然と差別に立ち向かった姿が
さすががしかった
故なく殺された七人の黒人の名を
マスクにつけて
一戦一戦勝ち抜いた

時を同じくして登場した新首相
〈自助 共助 公助〉と
言葉少な
ひと月たっても施政方針をも語らない
これは政見を持たないスカスカ首相か

と思いきや
科学者の聖域にズカズカと
人権も識見も踏みにじり
ふところ刀を振るう

スガスガ
スカスカ
ズカズカ

てんでちがう

私たちの望む首相とは

てんで変わる

視点の位置で政治の在り方が

「自助、共助、公助」
(本心：政府に反対する奴は排除)



「総合的、俯瞰的な
活動を確保する観点
から」判断をした



村上
ますえ

私の故郷自慢

No.10

◆わたしのふる里 《立川・砂川村》

わたしにもふる里がある。しかし私は、小学四年生まで流浪の民のように、ひとところに長く暮らしたことが無いので、今でも私の心の清涼剤のような存在の、光かがやく大切な二年間を振り返りたい。



満洲から追われる様にして、母と赤ん坊の弟と私の三人がお世話になったのは、母の実家でした。父はソ連に抑留されて、それから二年後に帰還した。空襲で渋谷の家を焼け出されたおじいちゃんおばあちゃん達は、今の立川市の在の砂川村に家と畑を求めて移り住んでいた。そこは五日市街道から入った五軒目の家で一番外れであった。そこから先は、真っすぐにのびる畑道の両側に見渡す限りどこまでも緑の畑が続いている様だった。そして一番遠い所には玉川上水の土手の防風林が視界の端から端までずっと連なっていた。畑に行く時はいつも下から三番目の正吉おじさんの自転車の後に乗



「コトコトコットンコトコトコットン
いつの日か……」当時の流行歌を色々歌うのが楽しみで、思い出すと心が優しい気持ちに包まれる。冬の縁側の日だまりで、下から四番目の

正巳おじさんが羽子板を造ってくれた。日本髪の子と梅にうぐいすの絵も描いてくれたのには今でも凄かったと思う。

正吉おじさんがギターで、上から四番目と五番目のおじさんがハーモニカで良く一緒に歌った。あのおばあちゃんの家で暮らしていたのは十人、私を除いて今は誰も残っては居ない。 【美浜 高橋】

お江戸散歩

No.1

【 明治大学平和教育
登戸研究所資料館 】



今年1月、明大キャンパス・登戸研究所資料館(小田急線「生田駅」から徒歩15分)を「たまりば」メンバー9名で訪れました。登戸研究所は、防諜・謀略宣伝など、「秘密戦」の兵器や資材研究開発のために、旧日本陸軍が設置し、一般には存在が秘密にされていました。資料館は2010年に開館、建物そのものが貴重な戦争遺跡です。構内には資料館のほかいくつかの遺跡もあります。資料館の学芸員の方が、丁寧に館内やキャンパス内を案内してくれました。「風船爆弾」は知っていましたが、偽札製造や、細菌兵器、電波兵器など



様々な研究開発を行っていた事に驚きました。戦時中、米軍はこの研究所の存在を知りながら爆撃せず、戦後、研究資料等をアメリカに持ち去り「CIA」で活用したという話を聞いて二度ビックリ。「平和」の有難さを感じるひと時でした。 【入船 松木】